

あるお檀家さんの一周忌法要の時です。そのお檀家さんは重い病を抱え、体を思うように動かすことができませんでした。法事が終わると、お檀家さんは丁寧に感謝を述べ、日頃の行いを私に話してくださいました。

「最近は何新聞を読んだり、読書ぐらいしかできなくなりましたが、家族に迷惑をかけたくないので、洗い終わった食器を元の位置に片付けたり、体の調子がいいときには、掃除機をかけることを毎日の日課にしています。それから仏壇や両親の遺影に手を合わせ、般若心経を唱えて感謝することを忘れないようにしています」と。それを聞いて、私はお檀家さんに「これまでのようにまずは簡単なことから始めて、続けていけばいいですよ」と答えました。するとお檀家さんは「私にとっては、簡単なことじゃないんですけどね。続けてやっています」と返されました。私はすぐに「しまった」と思い、身体中が反省と後悔と恥ずかしさでいっぱいになりました。

「簡単にできることかどうか？」それを私は、自分の基準で判断してしまっていたのです。私は自分ではお檀家さんに寄り添っていたつもりでも、実際は自分の基準にとらわれて、相手の気持ちになることが足りていなかったのかもしれない。一方お檀家さんのご家族は、病気で外出できないお檀家さんの代わりに、よくお墓にお参りされていました。ご病気のお檀家さんにご家族で寄り添い、共に歩んで来られたのです。

自分と他者をわけへだてることなく、共にあること、相手の気持ちを考え寄り添おうとするのは、菩薩としての行ないの出発点です。お釈迦さまは、相手と同じ立場に身を置き、心を寄り添わせることで人々を救済してこられました。上から目線ではなく、また見返りを求め媚びへつらう態度でもなく、同じ気持ちで共に喜び、悲しみ、寄り添って生きていくことは私たちにとって大切なことです。そしてそのような存在の人が傍らにいたことが、今生き辛さを感じている人の励みになると、私は信じています。

今回、私はお檀家さんから「寄り添う」ことの本質を、教えていただきました。この経験を出発点として、私は真の意味での「寄り添う」ということを実践していきたいと思えます。